
囚われた者たち

雨雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚われた者たち

【Nコード】

N9180W

【作者名】

雨雪

【あらすじ】

万事屋・真選組の元に届いた郵便物。真選組が銀時を逮捕！？露になっていく銀時達の過去。その原因は桂で！！攘夷戦争の後期に活躍した4大武神が再開！？黑夜叉と宇宙海賊 春雨 第七師団が動き出す！！

人に名前を聞く時は、まず自分から名乗れ！！（前書き）

初めての小説なので文章が変かもしれませんが、よろしくお願いします。

もちろん、批判は受け付けませんが感想などを送ってくれと嬉しいです。

人に名前を聞く時は、まず自分から名乗れ！！

〈キャラクター設定〉

吉田松陽 9月20日生 長州萩城下の松本村（現在：山口県萩市）
で松下村塾を開いていた 11月21日に死亡

坂田銀時 身長 177cm 誕生日 10月10日 25歳

桂小太郎 身長 175cm 誕生日 6月26日 25歳

高杉晋助 身長 170cm 誕生日 8月10日 25歳

坂本辰馬 身長 181cm 誕生日 11月15日 27歳

近藤勲 身長 184cm 誕生日 9月4日 29歳

土方十四郎 身長 177cm 誕生日 5月5日 25歳

沖田総悟 身長 170cm 誕生日 7月8日 18歳

山崎退 身長 169cm 誕生日 2月6日 23歳

神楽 身長 155cm 誕生日 11月3日 14歳

志村新八 身長 166cm 誕生日 8月12日 16歳

神威 身長 170cm 誕生日 6月1日 16歳

志村妙 身長 168cm 誕生日 10月31日 18歳

ほとんどは原作を基にしていますが、分からない部分は想像と史実を混ぜてます。

例を挙げるなら吉田松陽先生のキャラクター設定は、全て史実に基づいて作りました。

年齢に関しては原作本を参考にしたものなのでイメージと違ってたらスイマセン。

落し物は交番で!! (前書き)

記念すべき第1話です!!

感想をもらえると嬉しいです!!

落し物は交番で！！

俺は何故か戦場にいた

生きるため屍から食糧を漁った　そして刀を奪った

屍から奪った刀を俺はふるった

俺を異様だとバケモノだと言って襲ってくる村の男達に・・・

父や息子の仇と言って襲ってくる女達に・・・

そして戦場にいた屍と同じように食糧がないか漁った

中には夜に襲ってくる者もいた

だから俺は夜にまともに寝ることができなかった

夜は刀を抱きしめたまま気配を消して周りの音や気配に気を張りながら浅く眠った

ある日、屍から奪った握り飯を食べていると女の人みたいな長髪でグレーの髪をした男が突然現れて俺の頭を撫でた

俺は男の手を払い除けた

俺は、いつでも刀を抜けるように構えた

男が俺に敵意を向けてくることも襲い掛かることもなかった

男は全てを包み込むような柔らかで優しい声で話し掛けてきた

「^{かばね}屍を食らう鬼が出るときいて来てみれば」 「……………」

君がそう？」 「また随分と」 「カワイイ鬼がいたものですね」

「^{それ}刀も」 「^{かばね}屍からはぎとったんですか」 「^{わらし}童一人で屍の身ぐるみをはぎ そうして自分の身を護ってきたんですか」 「たいしたもんじゃないですか」 「だけど」 「そんな剣もういりませんよ」 男はそう言いながら自分の刀に手をかけた

俺は刀を鞘から抜いて、刀にかけた男の手の動きを見つめた

男は続けた 「^{ひと}他人におびえ自分を護るためだけに ふるう剣なんて もう捨てちゃいなさい」

男は刀を鞘から抜くでもなく刀を俺に向かって放り投げた

俺はよろけながらも受け取った

男は俺に背を向け歩きながら

「くれてあげますよ私の剣」 「^{そいつ}剣の本当の使い方をしりたきや付いてくるといい」 「^{そいつ}これからは剣をふるいなさい」 「敵を斬るためではない」 「弱き己を斬るために」 「己を護るのではない」 「己の魂を護るために」

俺は男に付いて行こうと何故か思った

その男の中に何かを見つけたような気がした

俺は男を追いかけて必死で手を伸ばしながら言った

「待……って……」

「待……って……」

「待……って……」

必死で手を伸ばしているのに届かない……

思うように声が出ない……

俺の声が届かない……

「待つて!!」

落とし物は交番で！！（後書き）

今回のタイトルの『落とし物は交番で！！』というのは銀時が幼い子どもとして足りなかったものが、見つかったという意味を込めました。

分かりずらくてスイマセン。

人の話を聞く時は、きちんと人の顔を見なさい！！（前書き）

突然ですが、アニメ『銀魂』を見ていると定春は神楽が寝ている押し入れの下側に寝てますよね。

定春の大きさを考えると狭そうですね。

では、第2話どうぞ。

人の話を聞く時は、きちんと人の顔を見なさい！！

ガバッ

銀時が目覚めると手を伸ばしていた。そして、すごい汗をかいていた。

「松・・・陽・・・せん・・・せい？」

その時、襖が開いた。

「クウーン」　まるで銀時を心配しているような表情だ。

「定春か。　起こして悪かったな。」

銀時は定春を見て不安そうな顔をしているのに気が付いたので　「大丈夫だ。」　と言い添えた。

すると定春はまだ心配そうな顔をしながらも押し入れの下に入り再び眠りについた。

銀時は再び夢を見るのが怖くて寝ようとせず立って壁にもたれながら少し開いていた窓から外を眺めながら、夢のせいか嫌な予感があると色々と考え込んでいた。

今はちょうど巳の刻（現在で言うと10時頃）　騒がしい江戸の町を単車が一台走っていた。それは、スナックお登勢の前で止まり単

車に乗っていた飛脚の男が茶封筒を持って万事屋の階段を上っていた。

ー万事屋ー

「はぁー どうするんですか!! 生活費!!」 となっているのは、もちろん新八 「神楽ちゃんと定春の食事ではほとんど底をついちちゃったじゃないですか!!」

「マジでか!? 卵かけご飯も食べられないアルか!?」 と神楽

「もう!! ホントどうするんですか!! 銀さん!! 聞いてます?」 「ねえ!! 銀さんってば!!」

「新八、銀ちゃん今朝からずっとこんな感じアル」 「何か変ネ」

銀時はいつもの社長イスに座り2人に背を向けて窓から空をボーッと眺めていた そんな銀時を2人が心配していると・・・

ピンポン

新八が玄関に向かいながら 「はぁーい」 「どちら様ですか? 新聞ならいりませんよー」 と言った。 さすが雑用係 新八 慣れているようだ。

扉を開けると茶封筒を持ってヘルメットをかぶった男が1人立っていた。

そして男が口を開いた。 「郵便です。 こちらにサインお願いしますか？」

「あつ、はい。」

新八がサインをすると 「ありがとうございます。」 と男が言った。

「ありがとうございますー。」 と新八が去っていく配達員の背に一言、声を掛けた。

「っん？ 誰宛だろう??」 「あつ、銀さん宛だ。」

すると神楽が玄関まで来ていたようで 「何だったアルか？」

「郵便みたい」

「珍しいアルな。 誰宛だったアルか？」

「銀さん宛みたい」

「どうするアルか？ 銀ちゃんずっとあんな調子だヨ？」

「でもまず一旦、中へ入ろうか。」

そして2人は事務所へと入っていった。

人の話を聞く時は、きちんと人の顔を見なさい！！（後書き）

文章めちゃくちゃですね。

前書きもいきなり定春の寝る場所について書いてあるし。

前書きで、そのことを書いたのは本文中で定春が押し入れに入り寝るからだっただんですが急に前書きが終わってしまいました。スイマセン。

今回のタイトル『人の話を聞く時は、きちんと人の顔を見なさい！』は銀時が新八達に背を向けてしまっていて2人の声を聞いていないというか声が全く届いていないので2人の声が届けばいいなと思います。分かりにくいですね。次からはもっと分かりやすくしたいと思います。

家族の郵便物でも、勝手に見ちゃダメ！！（前書き）

真選組の構成を見ていくと十番隊までありますよね。

その隊長たちの中の二番隊隊長が『永倉新七』という人がいるんですが、モデルになった人の名前が『永倉新八』という人です。

モデルの人自体を知っていたので志村新八と同じ名前なんで志村新八のモデルが『永倉新八』と思ってました。

関係なかったみたいですね。（笑）

まあ、この話も全然意味ないですけど（笑）
では、第3話どうぞ。

家族の郵便物でも、勝手に見ちゃダメ！！

ー真選組ー

広い部屋に近藤局長や土方副長、沖田隊長たち全隊士が集まって会議をしていた。

「最近、攘夷浪士どもの動きが活発化している。　というわけで、パトロールを強化する！！」　と土方が言つと

「ええー！！」　と隊士達が文句を言つた。

すると土方がすごい形相で山崎の胸ぐらを掴み　「文句があるとはいい度胸じゃねーか！！　山崎イ！！　叩き斬ってやらア！！」
と言つて刀を抜いた。

「えっ！！　僕、何も言つてませんよ！！」　山崎は焦つてすごい汗をかいている。　「局長、助けて下さいー！！」

「ハハハッ　相変わらず賑やかだな」

「局長ー！！」

「まあまあ、トシもそのへんにしとけ」　近藤がそう言つと

土方は　「わかったよ」　と言つて刀を鞘に納め会議を再開した。

他の隊士達は山崎の姿を見て正座をして文句を言わず静かに聞いていたため、その後は順調に会議が進み終わると隊士達のほとんどが

部屋を出ていき近藤と土方、沖田が部屋に残っていた。

沖田は会議が終わるなり愛用のアイマスクを着けて寝てしまった。

土方は最近の攘夷浪士どもの動きの活発化の理由や今後、何が起るのだろうかなどを考え込んでいる。

近藤は、そんな土方を心配そうな顔で見つめた。攘夷浪士どもものこともあり土方があまり眠れていないことを近藤は知っていたからだ。

屯所の玄関の方で「スイマセーン 郵便です。」という声がした

「あつ、はぁーい。 少々待って下さい。」 と山崎が返事をした。

この真選組で山崎以外にこんなことをする人はいない。なので山崎は『あれ、何か俺、万事屋の新八くんと似てない？ あれ？ 俺、雑用係だっけ？』 とそんなことを心の中で思っているうちに玄関に着いた。

すると配達員の男が茶封筒を差し出しながら「郵便です。 こちらにサインお願いできますか？」 と言った。

山崎が「あつ、はい。 ここですね。」 と言いながらサインをした。

「ありがとうございます。」と配達員の男が言った。

山崎は「ありがとうございました。」と言いながら郵便なんて珍しいなと思っていた。誰宛かと確かめると『真選組様』とだけ書かれていた。山崎は先程の会議をした部屋に行って、とりあえず局長に渡そうと思った。

会議をしていた部屋では、1名寝てるけど皆がそれぞれに考え込んでいると・・・

山崎が「失礼しまーす。」と言って中に入ってきた。

近藤が「どうした？」と尋ねた。

山崎は「郵便が届いたんで持ってきました。」と答えた。

「そうか。」と近藤は言いながら茶封筒を受け取った。

色々、考え込んでいた土方は攘夷浪士どものこともあるので何だ何だと警戒しながらそれを見つめた。

寝ていたはずの沖田もアイマスクを取って見つめた。

近藤が、それを受け取り開けると中から1枚のDVDと手紙のようなものが出てきた。

ー万事屋ー

新八と神楽が事務所の中へと入っていくと銀時は先程と変わらずだった。

―銀時― S 視点―

『何でよりによってあんな夢、見たんだよ。何かが起こりそうな気がする。俺は、もう何も失いたくねえんだ！！もし、あいつらに何かあったら俺は・・・俺は・・・』とそんなことを思っている・・・

「ねえ、銀ちゃんてばっ！！」「銀さんてばっ！！」と2人の声が聞こえた。

俺は何もなかったかのようにイスを回して2人の方を向いて「何だー」といつものだるそうな声で言った。

すると新八は少し心配そうな顔をしながら「銀さん宛に郵便が届いたんですけど。」と言って茶封筒を渡してきた。

俺が新八から茶封筒を受け取り開けると中から1枚のDVDと手紙らしきものがでてきた。

家族の郵便物でも、勝手に見ちゃダメ！！（後書き）

今回のタイトル『家族の郵便物でも、勝手に見ちゃダメ！！』は万事屋と真選組に同じような中身が入った茶封筒が届いたからですね。万事屋では銀時が朝から変な様子の時に珍しく郵便物が届き、真選組では攘夷浪士どものことがある時に届いたら何か怪しそうで気になりますよね。でも、プライバシーだから見ちゃいけないということでサブタイトルがあまりました。（笑）

あらすじで書いた『万事屋と真選組に届いた郵便物。』は、このことです。次の話からDVDと手紙の内容に触れていきたいと思えます。

地味な人は皆、かくれんぼが得意？（前書き）

スイマセンでしたー！！

先に謝っておきます。山崎ファンの方々本当にスイマセン。

サブタイトルに『地味』という単語がありますよね。

山崎「地味キャラとしかありませんでしたー！！

本当にスイマセンでしたー！！

ちなみに、分かりにくいと思いますが、この前書きの始まり方は銀魂の春祭りでの山崎の声をしている方の言葉を思い出してマネてみたものです。

地味な人は皆、かくれんぼが得意？

―万事屋―

銀時は中から出てきた手紙を読んで驚いた。茶封筒には『坂田銀時様』と書かれていたが手紙の最初に『白夜叉様』と書かれていたからだ。

続きを読むと『一緒に入っていたDVDと同じ内容のDVDをあなたのお友達に送らせていただきました。あの日が近づいていまずし、これからどうするかはあなたの自由ですが周りの方達に迷惑が掛からなければよいのですが……。それと、再びあなた方へ』と会える日を楽しみにしている。と、黑夜叉からの伝言です。』と書かれていた。

銀時は手紙に書かれていた『あの日』が今朝方に見た夢のこともあって何のことか判っていた。銀時は新八と神楽を巻き込まないようになしようと決心した。

一方、新八と神楽は心配しながら銀時の様子を伺っていた。銀時が手紙を見た瞬間に驚いたような顔をして、その後は真剣な顔になっていき詠み終わったような様子なのに黙り込んで何かを考え込んでいる様子になった。新八は「誰からだっただんですか？」と尋ねた。

銀時はいつもの調子で「昔の知り合いからだったわー。そいつ地味だったから全然、思い出せなかったけど新八を見てたらやつと思ひ出せたわー。いやー何か近くまで来てるみたいで俺に会いたって言うてるんだわー。だからちよっくら出かけてくるわ。」

と言って銀時は手紙とDVDを持って万事屋を出た。

万事屋に残った新八と神楽は不安そうに玄関を見つめていた。

―真選組―

近藤は手紙のようなものを広げ内容が皆に分かるように声を出して読み始めた。

『真選組様 一緒に入っていたDVDで面白いものが見れますよ。そのDVDと同じ内容のものを映像に写っている本人にも送らせていただきました。 皆さんは”白夜叉”をご存知ですか？ 攘夷戦争の後期に活躍したと言われる攘夷志士の1人。 その男、”銀色の髪に血を浴び戦場を駆る姿はまさしく夜叉”と言われていたそうですよ。 そんな夜叉と幕府の人間がお友達というのは、あまりよろしくないですねえ。 では、いつかあなた方に会える日を楽しみにしています。』

「「「・・・。」」」 3人の間で沈黙が流れた。

沈黙を破ったのは山崎だ。 「イヤ、俺まだいたからね！！ 地味だから忘れられてたかもしれないけどずっといたから！！」 と怒鳴っている。

「どついうことだ？」 と言ったのは近藤である。

「とりあえず、明らかに怪しいそのDVDを見てみようぜ。 何か分かるかもしれねえ。」 と土方が言った。

「何か面白くなりそうですね。」と沖田が表情を出さずに、そう言っているものの内心に危険なものを感じ緊張していた。

3人とも山崎の発言はなかったかのように普通に会話をしてテレビのある部屋へと移動してしまった。

山崎は3人の後を追って同じ部屋に移動した。

近藤が緊張しながらディスクをケースから取り出しセットした。部屋には緊迫した空気が漂っていて誰も言葉を発しようとしなかった。テレビに映像が映り始めると全員が息を呑んだ。

地味な人は皆、かくれんぼが得意？（後書き）

今回のタイトル『地味な人は皆、かくれんぼが得意？』は山崎が地味キヤラすぎて郵便物を渡した後どうしたのか考えてなくて地味キヤラを活かして無理やりに話を続けたわけで、あまりに可哀想なんです。タイトルにしたらもっと”地味”という単語を使いたいなーなんて思って銀時が新八に対して誤魔化す時に使える！！と思って銀時が新八に手紙が誰からなのか聞かれた時に”昔の知り合いで地味な奴から”と言って、その後”新八を見てたら思い出せたわー。”と言ってますが遠回しに新八を地味と言って新八も巻き込んだんじゃないかな。原作でも地味キヤラとして扱われているものの何か結構、軽いノリで地味キヤラ扱いしてスイマセンでしたー。以後、気を付けますー！！

テレビを見る時は、部屋を明るくして離れて見なさい！！（前書き）

途中で気づくの方がほとんどでしょうが、今回のセリフ等のほとんどは原作を見ながらやっています。

手抜きみたいでスイマセン。

では、第5話どうぞ。

テレビを見る時は、部屋を明るくして離れて見なさい！！

ー真選組ー

テレビのある部屋で4人がテレビに釘付けになっていると画面に映像が映り始めた。

ーテレビの画面の映像ー

某スタジオ

チャララー　チャー　チャ

「ザ　エドー！！」　「こんにちは　草野仁義ひとよしです」　「スクープです　今回　我がTHE　EDO取材班エドが　あの大物　攘夷浪士とコンタクトをとる事に成功しました」　「花野アナ」

「ハイ　今回　私が突撃取材を試みたのはこちら・・・」　「有相うさう無相むそうの攘夷浪士達の中にあつて一際　異彩を放つ」　「神出鬼没しんしゅつぎぼつ　変幻自在へんげんじざい　弱きを助け　強きを挫くくじラストサムライ　幕府から指名手配されながら江戸市中の人気も高いこの人物・・・」　「狂乱の貴公子の異名をとるKさん」　「えー　今回は手配中という事もありまして匿名でならという条件で一日密着を了承してもらいました」　「ベールに包まれた攘夷浪士達の真実が今　解き明かされる」　「彼らはこの国の行く末に何を見　何を為なさんとしているのか　THE　EDO独占スクープ　『日本の夜明け』　スペシャル！！　狂乱の貴公子一日密着！！」

画面の映像が変わって普通の民家の屋根の上を桂、花野アナ、エリザベスが話しながら歩いていった。

「なんとか逃げられましたね・・・私　なんか　スゴク疲れました」

「これからが本番だぞ」　「次は実際に重要人物と会い　説得するところを見せよう」

「重要人物！？　誰ですかそれは」

「俺達になくってはならん男だ」　桂はそう言って万事屋のチャイムを押した。　ピンポーン

すると・・・　ドゴシャー！！！！

「家賃なら　ねーって言っただろうが！！」　と言って銀時が扉ごととび蹴りをした。すると扉が桂の頭にあたったために穴が開き桂の顔がすっぽり貫通してしまった。

「桂さんんん！！！！」

「フフ　銀時　今日こそはウンと言ってもらおう」

銀時は扉を桂ごと元に戻そうとしている。

「貴様は俺と共に戦う運命にある」

ガタ　ガタ

「この腐った世の中を共に変えようではないか」 「容易ではない
だが 貴様と俺なら可能はずだ」

「桂さんどうですか!？」

「まア まずまずの好感触だ だが決定打に欠けるな」 「花野ア
ナ殿 ちよつと俺の懷からアレをとってくれるか 切り札だ」 「
駆け引きというのは先に手の内を見せた方が負ける 最後の瞬間ま
で切り札を保存している奴が勝つのだ」

顔が扉に貫通したままで何も気付いていない桂に神楽が近づき懷を
探っている。

ゴソ ゴソ

「あっ そうそう それそれ」

「フッフ 銀時 コレを見てもそんな態度がとれるかな!？」

神楽は桂の懷にあつた『んまい棒』をたくさん抱え1本食べながら
万事屋を去っていく。

「桂さん 切り札のんまい棒チヨコバー強奪されました」

「何!？」 と言つた時、扉が新八によつて開けられた。

ガララ

「・・・え? いやいやいやいや・・・いいつてお茶は」 「す

いません お構いなく」

バタ バタ

「カーツラあああ！！」

すると再び画面の映像が変わり先程の番組の映像ではなく録画されたものが映った。そこは、どこか高い建物の広い一室だった。誰も映ってはいないが声だけが聞こえてきた。

テレビを見る時は、部屋を明るくして離れて見なさい！！（後書き）

今回、DVDの内容を全て明かそうかと思ったのですが長くなってしまうのでやめたんですが、区切れるところで終わろうとしたら今度は短くなってしまいました。明日にでも、DVDの内容が全て分かるようにしていきたいと思います。

今回のタイトルの理由は書かなくても分かりますよね（笑）
テレビから離れて見ない自分からのアドバイスです。

絶対に後から後悔するから・・・うん・・・

説明はシンプルが一番！！（前書き）

今回は今までの話と比べて一番、長いです。

雑誌や単行本を読んだ方や第2期を見た方なら途中で気づくと思いますが今回も原作を基にしています。なので、読まなくても今後の話に支障はありません。全然、知らないという方は是非是非、読んでください。

では、第6話どうぞ。

説明はシンプルが一番！！

「ずいぶん殺風景な街になっちまったな 人がいねーと存外」

「この街もしおらしいツラしてやがらア」

「そちの娘が働きやすいようにな」 「歓楽街が子供の遊び場に早変わりじゃ」

「子供の遊び場ねエ」 「女狐の狩場の間違いじゃねーか」

「わしを見張りにきたか 次郎長よ」

「人聞きの悪いこといいやがる」 「この次郎長がそんなケチなマネするために相撲中継ほっぽいて わざわざこんな所に来るかい」

「とりにきたのさ」 「狐の首を」 「平子^{ガキ}を起爆剤とし この街に戦争を起こす」 「そして 四天王勢力 互いを消耗させ弱りきったところをまとめて潰し この街を独占する」 「まア 雑だが大方こんな所だろう」

「フン 伊達に長年わしと抗争をくりひろげてはいないということか だが 今頃わしを斬りにきた所で遅い」 「哀れな猿どもは既に一人残らず潰されてよう 次郎長貴様の娘もな」

「俺がてめーの策を看破しながら何の策もろうじていねーとでも」

「ろうじていまい」 「お前は娘がわしに利用されているのをしりながら泳がせていた 自身も踊る芝居をしていた」 「わしの兵力を分散させるために」 「協定の元 わしが平子に兵を貸すことがあればその虚^{きょ}をつき」 「手薄になった城に攻め入りわしの首を狙

うつもりだったのだろう」「だが わしが兵を動かした時には遅かった」「^{きよ}虚をついたはいいが貴様は自身の勢力を娘をエサにしたのだ」

「奴等がおとなしくエサになるタマとは思えねエがね」「なんせ長年 俺とやり合ってきた連中だ」「おかげで こうして美女と二人っきりでランデブーできてるワケだしな」

包帯で顔を多い白い服、白いマント、白いマフラーを身にまとった百人ぐらいの天人が現れた。その中の一人が喋り出した。「次郎長」「わしも 貴様とは長年やり合ってきた者であることを忘れたか」「ランデブーは断るが」「パーティーの用意ならできている」 その大勢の天人と共に一人の女性が映った。

「辰羅^{しんら}か」「夜兎^{だきに} 茶吉尼に並ぶ傭兵部族をここまで揃えるたア」「テメー やっぱりただの博打好きの姉ちゃんじゃねーな」

「・・・次郎長 永木に渡った貴様とわしの戦いもコレで終わりじや」「この街は もうわしのもの・・・」「いや 宇宙海賊『春雨』」「第四師団団長 華陀のものと云ったほうがいいのかえ」

「・・・ついに尻尾を出しやがったな 化け狐」

「世迷い言を・・・ とうの昔に気づいておろう」「貴様さえいなければ こんな街 吉原の鳳仙と同じくたやすく手に入れられたであろうに」「地べたをはいずる猿風情が随分と邪魔だてしてくれたな」「存じておるぞ 貴様がなり振り構わず外道に身をやつしてまでこの街に深き根を張ろうとしていたワケを」「我等」

「天人から この街を護るためであるうが」「今や江戸の町の半数以上が天人によって差配を握られておる」「しかし貴様は 勢

力を拡大しそれを示威することで内外からの天人による干渉をはねのけてきた」

「戦争を通して 学んだことが二つある」 「一つ目は このままじゃ この国は天人に食いつくされること」 「二つ目は 自分があまりにも無力だつてことだ」 「それでも 護りてーもんがあんなら」 「てめーが変わるしかあるめーよ」 「俺ア てめーらに勝つために」 「人間やめたのさ」 「華陀よ」 「他の街はしらねーが ここをたやすくとれると思うなよ」

「ククク・・・最強四天王は死に絶え貴様のみ」 「一体何ができると？」

「華陀・・・てめー一体今迄この街で何を見てきやがった」 「かぶき町を」 「なめるなよ」

ドゴォ！！！！ そこに万事屋3人組が襖を飛び蹴りしながら現れた。

「なっ・・・」 「なんじゃ 貴様らアアア！！」

「またせたな」 「ガングロジイ」 銀時は腰に真剣を差して右手には十手じゅうてを持っている。

「待ってたぜ」 「白髪あんの兄ちゃん」

銀時と次郎長と呼ばれていたと思われる男が辰羅族を挟はさんで会話をしだした。

「借り」 「返しにきた」 「・・・っついていいエ 所だが」 「

どうやらモタモタしているうちに勝手が変わっちまったようだな」

「察がいいじゃねーか」

「新八 神楽」 「西郷の息子のことは頼んだ」 「今頃奴等もヤベーことになってるだろ・・・時間がねエ」

「銀ちゃん・・・」

銀時は目線だけ神楽に向け左手で神楽の頭を撫でながら言った。

「約束しただろ」 「てめーら 信じて頼んでんだ」 「だったら
てめーらも 俺を信じろ」

「銀さん」 「かぶき町で」 「また会いましょう」

「ククク」 「おぬし 何をしにきたかしらんが女子供だけはこの
修羅場から逃がしてやったつもりか」 「ムダじゃ かぶき町に残
る四天王勢力は鼠一匹たりとも逃がさぬぞ」 「勿論 貴様も」

「次郎長も」

カチャ 銀時は刀に手をかけながら 「そんなんじゃねーよ」 と
言った。 「相手がテメーらじゃ加減もできそうにねーんでな」

「こつから」 「R18指定タイムだ」 と言つて刀を抜いた。

「よくわからねーが 要するにアレだろ」 「俺ア 次郎長もてめ
ーらも皆殺しにすればいいんだろ」

「・・・ククク」 「天下の次郎長と春雨相手に大見得きつてくれ
るじゃねーか兄ちゃん^{アン}」 「だが」 「わかりやすくていい」 「
のつたぜ 兄ちゃん^{あん}」 「俺も皆殺しだ」

「お互い孤立無援^{こりつむえん}」 「自分以外の動く奴ア^{てめー} 根こそぎ叩き斬れば
いいワケだ」

「最後に一人 ここに立つてた奴が勝ちつてな」

「アンタ・・・・・・・・・・偏差値低いだろ」

「オメー程じゃねーさ」

「ガハハハハハハ」

「・・・な」

「ゲラゲラゲラゲラ」

「なにが・・・・・・・・おかしい」

「ギャハハハハハ」

「何を笑っているのじゃ!!」 「貴様ら己の置かれた状況をわか
っているのか!」

「ダッハハハハ」

「貴様らもこの街も もうおしまい・・・」
すると、いきなり辰
羅族の大勢が吹き飛ばされ斬られている。

「クソジジイiiiiiiii!!」

「小僧オオオオオオ!!」

銀時と次郎長と呼ばれていたと思われる男が叫びながら部屋の真ん中に現れた。2人は背中合わせになりながら目の前の敵を斬っている。

「・・・なっ」

「俺が殺^やるまで死ぬんじゃねーぞ」

銀時と次郎長は出血しながらも敵を斬っていった。

銀時に斬られたはずの辰羅族の一人が倒れたまま刀を銀時の左足に刺して銀時の動きを止めた。そこに一人、銀時に飛び掛ったが銀時は自分の刀を足を刺した奴に上から刺して、それを軸として飛び掛ってきた奴を蹴り飛ばした。銀時が床に仰向けになって倒れていた時に2人が飛び掛ってきた。銀時は自分の刀と足に刺さっていた刀を持って飛び掛ってきた2人を下から突き刺した。その時に、銀時は右腹を刺された。

次郎長を辰羅族が数名、囲ってきた。次郎長は背後を獲ろうとした奴を斬り横から斬ろうとした奴の顔面を飛び蹴りし顔に刀を横から刺した。しかし、刺された奴は手で刀を抑え次郎長は左肩を斬られたが左手に持っていた鞘で突き飛ばした。

「ゼー ヒューー ゼー ヒューー」 銀時と次郎長は背中合わせになっていて周りには沢山の辰羅族が倒れていた。

「ぬぐっ・・・」 「こっ・・・」 「こ奴等・・・!!」 「とっ・・・止めよオオオ!!」 「春雨が名にかけて こ奴等の息の根 止めよオオ!!」 すると10人ぐらいが一気に2人に飛びか

かった。

2人とも背中を斬られたが構わず斬った奴を顔だけを向けて斬り前にいる敵を斬っていく。銀時は横から飛び掛ってきた奴に肩から腹にかけて斬られ次郎長は目の前にいた敵に右腹をきられ2人は血を吐いたが力を振り絞って自分を斬ってきた奴を斬ると2人は床にうつ伏せで倒れてしまう。

「これで最後じゃああ!!」 「とどめをさせエエエ!!」 すると、2人が飛び掛ってきた。

2人は血を流しながらも手を床について起き上がろうとしている。
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」 2人は飛び掛ってきた敵を斬った。

「・・・・・・・・や」 「やりおった」 「た・・・・・・・・たつた・・・・・・・・
・ たつた二人で」 「わ・・・・・・・・春雨^わの精鋭部隊を・・・・・・・・!!」

「ゼー ヒューー ゼー ハアー ゼー」

「こんな・・・下等な猿どもに」 「そんな・・・」

「ゼー ヒューー ゼー ヒューー」

「ハア ハア ハア」

「あ・・・・・・・・」 「あれは・・・・・・・・」 「おつ・・・・・・・・」 「お登勢・・・・・・・・!!」

「華陀様 市中に配した兵が各地で住民どもの抵抗にあっております

す。 「ここにもうじき四天王の率いる勢力が・・・」

ズバシャアア！！ ドシャア！！

「争いの絶えることのなかった無法者どもが」 「窮地を前に」

「一つになったと・・・」 「・・・クク」 「ハハハハハハハ」

「よもや この汚れた街が」 「かような勇ましき顔も もちあわせていようとは・・・まことに奥深き街よ・・・かぶき町」 「・・・
し時は阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄が如き街の顔をみることになるう」 「この
借り必ずや春雨が返す」

「ま・・・」 「・・・待ちやが・・・」

銀時が呼び止めようと足を動かした時、次郎長が足を引つ掛けて止めた。 2人は、そのままうつ伏せで倒れた。

「ゲホッ ゼー ハア ハア」

「ゼー ヒュー ゼー」

銀時は手を床について起き上がろうとしていて次郎長は仰向けに寝転がった。

「やれやれ・・・狐一匹街から追いだすだけで このザマたあ」

「年はとりたくねーもんだ」 「俺はともかく若い衆が情けねエ話じゃねーか」 「俺が若い頃は もっと・・・」

「年寄りとは思いつく補正が激しくていけねエ」 「年はとりたくねーもんだ」

次郎長は右手を床について座って布に包まれたキセルを取り出した。銀時はふらつきながらも何とか立ち上がった。銀時の着流しの中から十手が少し出ていた。

「・・・兄ちゃん」「そいつは・・・辰五郎の十手か」「どうして お前さんがそいつを・・・」

「勝手に・・・約束して」「勝手にかっぱらって来ただけさ」

「・・・フン」「俺もだ」「こうして煙をくゆらせる度 思い出す」「右手に十手を持って遊び左手に紫煙をくゆらせ」「街を飄々とゆく辰五郎の背中を」「絵になってやがったよ かぶき町とアイツは」「ヤローがこの街を好いていたように」「きつとこの街も」「辰五郎を好いていたんだろう」

「いくら煙ふかそうが いくら十手ふり回そうが」「俺達がマネできるこつちゃねえってか」

「・・・マネ事なんざ」「する資格もありやしねエよ」「辰五郎は辰五郎のまま死んでった 最後まで？通して」「俺なんぞのために護るもん残したまんま のたれ死んでった」「俺が」「殺したのさ」「だつたら俺は？捨てても・・・人間捨てても・・・」「生きて辰五郎の残してったもん護るしかあるめエ」「・・・俺ア 天人どもに この時代に・・・飲みこまれるワケにはいかねエ」「はいつくばっても この街で生き抜いて護らなきゃいけねエ モンがある」「たとえ」「この街に嫌われよう」と

「・・・てめエ」「やっぱりバーさん殺るつもりな

かったな」

「昔から目ざわりで仕方なくてな あのパバア」 「人が何かする度 横からギヤーギヤーと」 「小言はもう うんざりでな」 「アイツを見てると 決心がゆらぎそうになっちまうんだよ」 「お前らを見ると また元の次郎長に戻っちまいたくなっちまうんだよ」 「邪魔なんだよ」 「辰五郎」 「白黒ハッキリつけようじゃないか」 「俺とてめーら・・・どちらがこのキセルと十手^{じって} 番人の証を持つにふさわしいか」

「番人なんざ興味はねーよ」 「ただ もう二度と約束を違^{たが}うつつもりはねエ」 「アンタも」 「そうだろう」 「曲がらねエのも 曲げられねエのも」 「もうお互い百も承知のはずだ」 「だったら 相手へし折つてでも進むしかねーだろ」

2人はお互い持っていたキセルと十手^{じって}を空中に投げた。そして、2人は刀に手をかけた。

「俺は俺の約束のために生きる」 「だから」 「お前は
お前の約束のために」 「死んでゆけ」 2人は斬りかかった。

「おやじイイイイイ」

カラン キセルが半分に切れて床に落ち十手^{じって}は銀時が左手でキャッチした。

「砕けたのは てめーの約束だ^{キセル}」 「俺の勝ちだな」

ピキッ パキイン すると、次郎長の刀が粉々に砕けた。

「てめエ・・・何故・・・斬らなかった」

「・・・言っただろ」「俺ア

もう二度と約束は違^{たが}わね

エ」「禁煙しろ」「クソジジイ」

銀時は十手^{じって}を着流しの中に

入れながら、その部屋を出て行った。

説明はシンプルが一番!!（後書き）

どうだったでしょうか？初の戦闘シーン 原作を基にしていますが
絵がない分、状況を分かりやすく伝えなければと努力したんですが・
・

今回のタイトル『説明はシンプルが一番!!』は銀時と次郎長は結構、軽く『皆殺し』というシンプルな考えを言っていたのに実際は尋常じゃないくらい、すごかったのでタイトルをこうしました。

出かける時は、行き先を伝えてから行きなさい！！（前書き）

この話からは色々なキャラクターが動き出すので、どう動かそうか悩んだんですが、もし変だったらスイマセン。一応、口調だけは原作を基にちゃんとやっただつもりです。

では、第7話どうぞ。

出かける時は、行き先を伝えてから行きなさい！！

数ヶ月前

とある一室

「黒夜叉様 元第4師団団長 華陀の居場所が分かったそうですよ。それで、鬼兵隊という攘夷浪士どもに捕まえに行かせるみたいですよ。」

「それがどうかしたか？」

「内部の派閥争いに敗れた後、組織の資金の横領し地球に逃亡し、かぶき町四天王の一人に上り詰めたとか・・・」

「興味がないな。」

「それがですね、面白いことが分かったんですよ。」 と言って怪しげな笑みを浮べた。

「何だ？」

「今、かぶき町では四天王勢力同士が争っているようで、その四天王の中にお登勢という人がいるそうなんですが・・・今はその人が標的にされているようで、この人間自体は強くないのですが用心棒が1人いるんですよ。その用心棒と他のそれぞれの四天王勢力が均衡を保てるぐらいのね・・・」

「たかが、人間だろ。」

「その用心棒というのは、あなたが興味を持たれている人間ですよ。」

「ほう、あいつか」「で、あいつがどうかしたのか？」

「華陀がこの争いのために辰羅族を大勢集めて四天王の一人を潰そうとしているみたいで、もしかしたらそこにそのあいつも現れるかもしれませんよ。そうすれば面白いものが見れますよ。」

「そうだな。で、それはいつ頃なんだ？」

「明日ぐらいにでも起こるんじゃないですかね？ 華陀が居そうな場所も特定できてますよ。」「なので、隠しカメラ設置ぐらいなら簡単にできますが？ どうなされますか？」

「設置しとけ。今すぐにだ。」

「分かりました。では、行って参ります。」

「ああ」

男が1人、部屋から出て行った。部屋に残った黒夜叉と呼ばれた男は怪しい笑みを浮べた。

ー現在ー

銀時は手紙の内容に動揺しすぎてスクーターに乗らずに走って桂の

隠れ家に向かっていた。しばらくすると、桂の隠れ家に着いた。銀時は息が切れるのを我慢して部屋の中に入ると、桂の仲間たちがいた。

すると1人の男が話しかけてきた。「桂さんなら『かまっ娘倶楽部』で資金を稼いでくると言われて今はいませんよ。」

「そうか。」と言って銀時は部屋を出て行き『かまっ娘倶楽部』に向かった。

『かまっ娘倶楽部』に着くと・・・

「やあー！！ パー子じゃない！！ また、ここで働いてくれるの！？」と声を掛けてきたのはアゴ美・・・じゃなかった、あずみだ。

銀時は今はそれどころではなかったので、あずみを無視して言った。

「桂・・・じゃなくてツラ子いる？」

「ツラ子？ ツラ子なら、さっき帰ったわよ。確か、『北斗心軒』に行くって・・・」気が付くと銀時の姿がなかった。「今日のパー子、何か様子が変わったみたいだけど、どうしたのかしら？ ママに言ってみようかしら？」

一方、銀時は『北斗心軒』に向かっていた。のれんをくぐって扉を開けると・・・

「いらっしやい」という幾松の声が聞こえた。

銀時が店内を見回すと桂がラーメンを食べていた。

「よう、ツラ」

「ツラじゃない桂だ!!」 というお決まりの台詞を言った。

「ちょっと重要な話があんだけど・・・」 と銀時は焦りを隠してなるべく冷静に言った。

桂は銀時が焦っているのを隠していることが直ぐに分かったのでラーメンを残して幾松に代金を払って店を銀時と一緒に出了。「銀時、誰にも聞かせられないことがあるのだろう? 誰かに見られてしまつては困る。人がいない所にでも移動しよう。」

「ああ」と銀時は言った。

「リーダー達には何も言わず出てきたのか?」

「ああ、あいつらを巻き込むわけにはいかないしな。」

2人は人が居ないような路地裏に向かっていた。その後ろで誰かが見ていたのも知らずに・・・

出かける時は、行き先を伝えてから行きなさい！！（後書き）

この話では黑夜叉などキャラの特徴が掴めていない人が出てきたので、苦労しました。銀さんと桂、あずみはどうだったですか？変だったでしょうか？

今回のタイトル『出かける時は、行き先を伝えてから行きなさい！』誰でも子どもの頃は両親に言われたんではないでしょうか？今回の話で銀時は桂を探し回っていました。もし、行き先を行ってなかったら見つかってなかったでしょう。まあ、行き先を言ってたか言ってなかったかで物語が左右するのでサブタイトルがああなりました。

喧嘩をするほど、仲がいい？（前書き）

もう最初に言っておきます。

グダグダです。

スイマセン。

では、グダグダな第8話をどうぞ。

喧嘩をするほど、仲がいい？

真選組のテレビのある部屋

DVDを見終わった後、誰も口を開くことができなかった。桂と親密な関係があるという事は誰もが見て判ったが、後の映像の死闘を見て誰も口を開くことができないのである。

最初に口を開いたのは前から桂と銀時の仲を怪しんでいた土方だ。

「これではつきりした。万事屋は桂と親密な仲ということがなあの番組を見る限り桂は前から万事屋を知っていた様子だったかな。それに、手紙に書いてあった『白夜叉』って奴は万事屋のことか？ しょっ引くか？」と言いながら土方は煙草に火を点けた。

「だがな、トシ。万事屋が攘夷浪士かどうかということについては判っていない。それに、桂は万事屋を仲間に入れようとしているということとは、万事屋は攘夷活動をしていないということもありえる。それに、『白夜叉』は攘夷戦争に参加していたということだけしか分かっていないんだぞ。まだ、万事屋のことかどうかは判っていない。」と言って土方を止めようとしているのは近藤だ。

「そうですね、土方さん。旦那が攘夷なんて思想、考えてるはずありやせん。」と言ったのは沖田だ。

「桂と知り合いということは万事屋も攘夷戦争に参加していた可能性がある。山崎、他の觀察に攘夷戦争の参加者の中に万事屋の名前がないか調べさせる。それと、白夜叉についてもだ。山崎てめえは万事屋を張り込め。もしかしたら、桂と会うかもしれねえ。」

「土方は山崎に言っていると煙草の煙を吐いた。」

「わかりましたああああ！！」　と言って山崎は走って部屋を出て行った。

山崎は他の観察に土方から言われたことを伝えると張り込みの時のお約束のあんぱんと牛乳を買いに大江戸マートに来ていた。山崎が店から出ると路地裏に入っていく銀時の姿が見えた。その隣には笠を被っているが、あの長髪は・・・桂だ！！と山崎は2人の後をつけた。山崎は心の中で『これで旦那と桂の関係が分かるいいチャンス！！』　と思っていた。

銀時&桂's 視点

2人は路地裏に入った。

「で、どうしたのだ？」　桂は気になっていたことを銀時に尋ねた。

「これを見る。」　と言って銀時は桂に手紙を差し出した。

桂は銀時から手紙を受け取り見ると宛名が『白夜叉』になっていることに気が付き目を見開いた。「どういうことだ？　何故、このことを知っているのだ。　銀時、心当たりはないのか？　銀時のことを知っている他の奴は、高杉と坂本だけのはずだろう？」

「ああ。　^{ヤッ}黑夜叉に情報がどう流れたのかは、だいたいは想像がつ

く。ただ、俺のことを調べてんのは黒夜叉^{ヤッ}だけじゃないみたいだな。」

「そのようだな。ここから立ち去った方が良さそうだな。」と桂は言った。

銀時は桂にだけ聞こえるぐらいの小さな声で「もうすぐ、あの日だ・・・」と言った。

「そうだな・・・」と桂も銀時にだけ聞こえるぐらいの小さな声で言って、どこかに行ってしまった。

隠れて様子を見ていた山崎は自分のことを言われているのだと思い驚いて大江戸マートで買った物を落として固まってしまった。観察は決して見つかったはいけない。見つかるということは即ち死^{すなわ}を表すからである。

「よう、出て来いよ。ジミー君。」

山崎は恐る恐る姿を現した。

「大串君に伝えとけ。調べたきや調べてくれていい。それと、俺は攘夷浪士じゃねえよ。攘夷志士^{じし}だった。」と銀時は真剣な顔で言いながら、背を向けその場を去って行った。

一方、その場に残された山崎は困惑したまま動けずにいた。しばらくすると少し落ち着いたのか頭の中で整理していた。でもまだ困惑した表情を消せずに屯所へと歩を進めた。

隠れ家に帰ろうとしていた桂は 『銀時が黒夜叉から解放される時は来ないのだろうか？ また、銀時から何もかも奪ってしまうのか？ 先生も・・・ 攘夷戦争の仲間達も・・・ 残るのは後悔と自責の念だけ・・・』 と銀時のことを心配していた。

路地裏を出た銀時は万事屋に帰りながら考えていた。 『また、あの日が来る。 皆が揃うことは叶わないのか？ なあ、先生？』

真選組

山崎は先程の銀時と桂の会話について近藤たちに話した。 もちろん、見つかったことがバレてしまい土方に殺されかけたが・・・

「万事屋が攘夷志士じいしだと言ったんなら、攘夷戦争に参加していたということになる。 ということは、桂が言った『高杉』というのは超過激派攘夷浪士 高杉晋助のことか。 で、その『坂本』という奴も参加していた可能性があるな。 その『黒夜叉』と言う奴も、怪しそうだな。 山崎、『坂本』と『黒夜叉』についても他の観察に調べさせる。」 「山崎、てめえは張り込みを続ける。 次、見つかったら切腹だ。」 土方は煙草を吸いながら言った。

「わかりましたああああ！！」 と言って山崎は慌てて部屋を出て行った。

「トシ、万事屋が現在、攘夷活動を行っているかどうか判ってもい

ないのに、ちよつとやりすぎじゃないか？」と近藤は土方の判断に不安を抱いていた。

「『喧嘩をするほど、仲がいい』っていいやすからねえ。仲良しだから信じたいのは分かりますが・・・」

「総悟、誰が万事屋と仲良しだ！！」と土方がキレた。

「そうですかい。」と言って沖田は部屋を出て行ってしまった。

近藤は珍しく沖田が土方に言われても特に何も言い返さず、そのまま部屋を出て行ったので沖田のことが心配だった。近藤は局長だからだろうか沖田が銀時のことで不安になっているのだと気が付いていた。

一方、沖田は部屋に戻りながら『旦那が攘夷浪士なはずありやせんよない？俺あ、旦那を信じていいんですよない？』と心の中で思っていた。

喧嘩をするほど、仲がいい？（後書き）

しばらく、諸事情により更新することができません。

次に更新ができるようになるのは10月中頃だと思います。
本当にスイマセン。

皆の心情や行動を考えてるのですが変だったでしょうか？

一番、悩んだのは山崎ですね。銀時に見つけた山崎がどう行動するのか。他は、自分でストーリー考えているのに登場人物が言った台詞等を忘れて矛盾が出てくるところですね！。

今回のタイトル『喧嘩をするほど、仲がいい？』は話の中で沖田が言っているので気が付いてくれたと思います。

仕事に私情は禁物！！（前書き）

こんな作品を読んでくださっている皆様、久しぶりです。
やっと慌しかった日々も終わりました。

しばらくは、また前みたいに更新できると思います。

では、第9話をどうぞ。

仕事に私情は禁物！！

万事屋

まだ日が昇っていないくて外が薄暗い頃、神楽と定春が押し入れで寝ていて新八がまだ来ていない静かな万事屋の事務所で銀時は日捲りカレンダーを見つめていた。日捲りカレンダーには11月21日と記しるされていた。11月21日は松陽先生の命日だ。銀時は、いつもの着流しに洞爺湖の木刀ではなく鉄子に貰った刀を腰に差していた。銀時は事務所のテーブルの上に置き手紙を残すと玄関を出てスクーターに乗ってどこかに出かけてしまった。

山崎は建物の影から銀時を張り込んでいた。どうやら今回はまだ、気が付いていないようだ。銀時がスクーターに乗って、どこかに移動し始めたので屯所に連絡してパトカーで追尾してもらうことにした。山崎は銀時が向かった方に走っていき周りの人に聞き込みしながら銀時の後を追った。銀時が銀髪というのと万事屋を営んでいて有名なこともあって探し出すのは容易だった。山崎が銀時を見つけた場所は看板に『花いっぱい』と書かれた花屋だった。銀時が花屋で花束を受け取り何かを話している間に屯所に場所を連絡した。

花いっぱい

「ちょっと、いいか？」　と言ったのは銀時だ。

「まだ開店してないわよお。」と開店の準備をしていた脇薫が手を動かしたまま顔も向けずに答えた。

銀時は脇薫の言葉を見殺しに言った。「墓参り用の花束一つ作って欲しいんだけど。」

「ちょっと、まだ開店してないのよお。」

「今日は必要なんだよ。どうしても・・・」

「わかったわよお。ここ片付けたらやるから少し待っててよお。」

「助かるぜ」

しばらくして、銀時は脇薫から花束を受け取り少し雑談をしていた。

山崎が花屋にいる銀時を交差点にある建物の影から見ているとパトカーが止まった。『パトカー来るの速っ！』とか、そういうのは気にしない。もちろん、追尾するのだからサイレンを鳴らして来たわけでもない。山崎が体をパトカーの方に向けると助手席の窓が開いた。山崎は誰が乗っているのか知らなかったので乗っていた人を見て驚いた。パトカーを運転していたのは土方、助手席の窓から顔を出しているのは近藤、後部座席に座っているのは沖田だ。山崎が驚いたのは乗っていたのが平隊士ではなく局長の近藤や鬼の副長と恐れられる土方、そして一番隊隊長 沖田が乗っていたからだ。

「で、万事屋は見つかったのか？」と近藤が尋ねた。

「あつ、はい。　どうやら、花束を買ったようですね。」と山崎は答えた。

土方が煙草に火を点けながら言った。「花束を買ったということ
は、誰かに会うつて何か？　万事屋が誰かに花を贈るような奴に
見えねえがな。」

「あの、一つ気になることがあるんですけど。」と山崎が言った。

「何だ？」と答えたのは土方。やはり銀時のことだから気になる
のだろうか？

「それが、いつもは腰に木刀を差してるのに今日は真剣なんですよ。」

「どういうことだ？　花束を買った奴が何で真剣なんか腰に差してる？」

「うゝん。」近藤もどうやら考え込んでいるようだった。

沖田は3人のやり取りを後部座席で頼杖をつき空を見上げなら静かに聞いていた。山崎が花屋にいる銀時の方を見ると、スクーターに乗ってどこかにしていた。

「あつ、どこかに行くみたいですよ！！」と山崎がパトカーに乗っている3人に向かって言った。

「早く後ろに乗れ！！」と土方が行った。

「あつ、はい。」 山崎は急いで後ろに乗り込んだ。

4人が乗ったパトカーは銀時に不審に思われないように、なるべく距離をとって走った。パトカー内は会話もなく静かだった。誰もがバレないかとか見失ったりしないかとか気にしていたからだ。そんな緊張状態が一体、何時間続いただろうか。11月になって段々と暗くなるのが早くなってきたからだろうか出発したのは朝方だというのに外は結構、暗くなっている。現在、居る場所は江戸の賑やかな街とは違って静かな村だった。周りは山に囲まれていて田畑があちこちにある。天人がやって来た世界とは思えないくらいの静かな村なのである。

万事屋

ガララ

「おはようございまーす。」 万事屋の事務所に入ってきたのは新八だ。新八は手馴れた様子で押し入れを開き神楽と定春に声を掛ける。「神楽ちゃん、定春、起きてー。もう朝だよー。」 新八は銀時も起こそうと思い寝室の襖を開けながら「銀さんも起きてくださー。」と言いかけてやめた。いつもなら寝ているはずの銀時はいない。布団はきちんと片付けられていた。新八が「銀さん。どこですかー？」と言いながらキッチンや厠、洗面台がある方を覗いて銀時を探した。が、銀時はどこにもいない。新八が『どこにいるんだろう?』 と思いながら万事屋の事務所に入ると、テーブルの上に1枚の紙を見つけた。「ん? 何だろ?」 と言つて新八が、その紙を拾い上げて見ると銀時の置き手紙だっ

た
・
・
・
。

仕事に私情は禁物！！（後書き）

小説を書く時間は無理だったのですが、インターネットを開いたり
は少しできたので小説を作成するための、このサイトをちよくちよ
く見ていました。すると、日に日に評価ポイントやお気に入り登録
件数が増えていきました。些細なことと思われるかもしれませんが、
こんなに数字が1つ上がるだけで嬉しく思ったことはありません。
読者の皆様、本当にありがとうございます。

久々に更新した今回の話のタイトル『仕事に私情は禁物！！』は仲
良し？な銀時のことが気になるのか平隊士ではなく真選組のトップ
が追尾しているということは仕事に私情をはさんでいるということ
ですよ。特に彼らは警察なのでから仕事に私情を持ち込むなど言
語道断なわけとなりました。実際は、元々のタイトル『スト
ーカーは犯罪行為！！』について後書きを入力していた時に今回の
タイトルを入力してコレいいじゃん！！って思って決まったんです
けどね（笑）

『失敗は成功のもと』って言うけど、やっぱり失敗する！！（前書き）

『前みたいに更新できると思っ』と言った次から数日、更新できま
せんでした。
スイマセン。

では、第10話をどうぞ。

『失敗は成功のもと』って言うけど、やっぱり失敗する！！

万事屋の事務所

「んっ？ 何だろ？」 と言って新八は事務所のテーブルの上にあった紙を拾い上げて見ると銀時の置き手紙だった……。

（銀時の置き手紙）

神楽、新八へ

しばらく帰れねえ。

だから、万事屋はしばらく休止する。

神楽、お前は定春と一緒に新八の家に行け。

新八、神楽と定春のこと頼んだ。

銀時より

「えっ…… コレどういうことですか？ 銀さん？」 新八は銀時の最近の様子が変だったため置き手紙が最後の別れのような嫌な感じがして銀時の居ない万事屋の事務所の天井を寂しく見上げながら呟いた。

そこに、神楽が目を擦りながら起きてきた。 神楽が起きたと同時に定春も起きてきた。

「どうしたアルか？」

「えっ・・・ いや・・・」 新八は慌てて銀時の置き手紙を背中に隠して神楽にどう言ったらいいのか迷っていた。以前、銀時が記憶を失い『万事屋を解散する』と言って万事屋を出て行った時、神楽は銀時の帰りを信じていつ壊れてもおかしくない万事屋に居続けた。神楽も銀時の最近の様子が変だという事は感じているから、その時のように万事屋で待とうとするだろう。新八は神楽が心配なのだ。もし、銀時がこのまま帰って来なければ・・・

神楽はなかなか何も言おうとしない新八が背中に何かを隠しているのに気が付いた。 「っうん？ 新八、何隠してるアルか？」

「！！」 新八は諦めて銀時の置き手紙を神楽に見せた。

「！！」 新八、コレということアルか？ 神楽は新八に尋ねた。

「僕が、万事屋に着た時からあったみたい・・・ 銀さんを起こそうと寝室に入ったら銀さんは、もう居なかったんだ・・・ それで、銀さんを探してたらそれが・・・」 新八は俯きながら答えた。

桂アジト

「桂さん、出発の用意が整いました。 本当に、御一人で行かれるですか？」 と桂の部下が言った。

「ああ、大丈夫だ。 船の操縦はエリザベスもいるから・・・」 と桂が答えた。

「そうではなくて・・・あの、もしかしたら・・・」と部下が言いかけた。

「大丈夫だ。たぶん、あそこにはアイツもいるだろうしな。」
と桂は部下の言葉を理解した上で遮り言った。もしかしたら、桂はその続きを聞きたくなかったのかもしれない・・・

かまっ娘倶楽部

「あつ、ママ。　そういえばこの前、パー子がヅラ子を探して来ただけど、何か様子が変わったのよ・・・」と言っているのはアゴ・・・じゃなくて、あずみだ。『しつこい!!』というツツコミがどこから聞こえそうだが気にしない。

「この前のこともあるし頼って欲しいんだけど、パー子は全部を背負い込んでしまうのよね・・・」と西郷は人に頼ろうとしない銀時に寂しさを感じながら言った。西郷の言っている『この前のこと』というのは、かぶき町の四天王同士で争った時のことである。あの時、銀時は息子を入質に取られていた西郷に何も言わずに西郷の息子を助けに行かせたのだ。

「女より気高く　男より逞しく・・・」とあずみが西郷の口癖を呟いた。

西郷はあずみの言葉で何かを決意したように「あずみ、パー子の所に行くわよ。」と言った。

「「「「うん!!」「」「」」

「「!!」」

いきなり聞こえた返事は影から聞いていた化け・・・従業員達だった。大切な西郷の息子を助けた銀時に感謝しているからだろう。

真選組のパトカー' s 視点

「どこに行くつもりだ？」 と近藤が言った。

「真剣を腰に差して花束持って、何をするつもりだ・・・ それより、ここはスクーター一台走ってるだけで目立つ、パトカーとなると一層目立つ。もう少し、距離を取るぞ。」 と運転をしている土方が言った。

「それはいいが、今でも十分距離を取っているのに大丈夫か？」 と心配しているのは近藤だ。

銀時' s 視点

『途中からヤツらが付いて来てるの気付いてたけど、大事な花束があるからスピード出せねえから・・・ それに、ここらはかぶき町とは違って隠れるような場所もねえしな・・・』 と思っていると目的地のそばまで来ていることに気が付いた。『とりあえず、スクーターを止めてからヤツらを撒くか。』 と思いきスクーターを

空き地に止め歩き出した。

真選組のパトカー's 視点

「歩くみたいだな。 その小さな民家の影の所に止めて後は、走って追いかけるぞ。」 と土方がパトカーに乗っている他の2・・・じゃなくて、3人に言った。

「はい!!」 と返事したのは山崎。

近藤は、依然として黙ったままの沖田の方を向き心配そうに「ああ。」 と返事した。

『失敗は成功のもと』って言うけど、やっぱり失敗する！！（後書き）

今回のタイトル、『失敗は成功のもと』って言うけど、やっぱり失敗する！！』は山崎が以前、銀時を張り込もうとした時、偶然見かけ影から見えていたけど結局、見つかり本人達はまだ気づいていませんが今回も見つかってしまいました。ただ、今回は山崎が失敗したと言うわけではないけど・・・運転していた土方は山崎が見つかったのを知っていて細心の注意を払ったにも関わらず見つかったからタイトルがそうになりました。

かまっ娘も動き出しましたー！！あずみの扱いが酷いのはスイマセン。

大人でも迷子になる！！（前書き）

更新することができましたー！！

展開に悩んでいる今日この頃・・・

では、第11話をどうぞ。

大人でも迷子になる！！

真選組メンバー's 視点

4人は走って銀時を追いかけていた。

「あつ、走り出したみたいだぞ！！」 と近藤が言った。

「急ぐぞ！！」 と土方が指示を出した。

「はい！！」 と山崎は答えた。

近藤は 「ああ。」 と答えた。

沖田は返事もせず、ただ3人の後ろを走っている。

銀時が山の中に入って行った。4人は銀時に見つからないように慌てて山の麓^{ふもと}まで走って行き地面に落ちている落ち葉などで音を出さないように慌てつつも慎重に山の中に入って行った・・・。

・・・が、山の中ということもあって、そう簡単ではない。特に、4人は自分達がどの山に居るのかさえ分からないのである。そう、大の大人4人が迷子というやつである。4人というか3人はキョロキョロ辺りを見回しているが4人の内の1人、沖田がキョロキョロ見回すことなく真っ直ぐどこかを見つめていた。

銀時's 視点

『よしつ、走って山の中に入るか。山の中だと隠れやすいし初めて来た奴なら迷うだろうしな。』 と思い花束に気を付けながら走った。山の中に入り、しばらくしてから木の陰に身を隠し気配を消した。すると、しばらくしてから真選組のメンバーが音を出さないように気を付けながら歩いているつもりなのだろうが気配を消せていないから居るのが判った。思った通り迷ったみたいだ！4人というか3人がキョロキョロ見回している。『んっ？ あれ、何か沖田君こっち見てる・・・？ 気付かれたか・・・？ やべえな、これじゃあ動けねえ。』

真選組メンバー's 視点

「総悟、お前も探せ！！」 と土方は言って沖田の方を向いた。すると、どこか一点を見つめてポーツとしているので「総悟？ 何か見つけたのか？」 と尋ねた。

『今、誰かがこっちを見ていた気が・・・』 と沖田は心の中で思ったが慌てて「いえっ。」 と答えた。

『総悟・・・』 沖田がずっと様子が変わるので近藤も心配していた。

銀時's 視点

『ありゃ、完全に見られたな。もう、諦めて木の陰から出るか・・・』

万事屋

ピンポーン

「・・・ あっ、はい!!」 新八は俯うつむいていた顔を上げて玄関の方に走っていった。

ガララッ

新八が玄関の扉を開けると、そこに立っていたのはマドマーゼル西郷だった。

「パー子居る？」 と西郷が新八に尋ねた。

新八は少し戸惑いながら 「ちょっと、出掛けてます・・・」 と答えた。

西郷は新八の様子が変なのに気が付いたのか 「どうかしたのかい？」 と尋ねた。

新八は慌てて何もなかったかのように 「いえっ!!」 と答え話を逸らそうと西郷に尋ねた。 「銀さんに何か御用ですか？」

西郷はそれでもまだ変に感じながら答えた。 「この前、パー子がウチの店に来てくれたみたいなんだけど、様子が変わったらしいから前に息子を助けてもらったし心配して来たってわけ・・・。」

「そうだったんですか・・・ 実は、『しばらくは、帰れない』
っていう置き手紙があっただですよ・・・」

「もしパー子、帰ってきたら連絡してね。 後、何かあったら連絡
してきていいからね。」

「はい。」

西郷は帰っていき新八は万事屋の事務所に入って行った。

「西郷が来てたアルか？」 新八が事務所に入ると神楽が新八に尋
ねた。

「うん・・・ この前、銀さんが『かまっ娘倶楽部』に来た
時に様子が変だったから心配して来てくれたみたい・・・」 と答
えた。新八は俯うつむいて元気のない神楽を見て「神楽ちゃん・・・
しばらくは、ウチに来よっか・・・？」 と慎重に言った。もし
かしたら、『万事屋で待つ！』 と言うかもしれないからだ。
新八は、さらに続けた。「銀さんなら、きつと帰ってくるから・・・
・ 僕達が銀さん信じないで誰が信じるの？ っね？ 一緒に、帰
ろう？」

神楽は、まだ俯うつむいたまま小さく「うん・・・」 と返事した。

その後、神楽は新八に手伝ってもらいながら新八の家に泊まるのに
必要な物をまとめて新八の家に一緒に帰って行った・・・。

とある船

「エリザベス、この様子だと予定通りに着きそうだな……。ついに、来たのだなこの日が……。」「と言っているのはお気づきかもしれないが桂だ。

エリザベスは「桂さん……。」「と書かれたボードを持っている。

大人でも迷子になる！！（後書き）

今回のタイトル『大人でも迷子になる！！』は土方達が山で迷子になったからです。行ったことある山でも迷うことあるのに、初めて行く山で迷ってしまうのは仕方のないことだから「自分は大人だから大丈夫」とか言って迷わないように「気をつけてね」という意味を込めてタイトルをそうしたわけです。

短気は損気！！（前書き）

更新、遅くなってスイマセン。

では、第12話をどうぞ。

短気は損気！！

とある山

真選組の4人は銀時を追いかけて山の中に入ると銀時を見失い、その上迷子になっていた。

ガサツ

物音に真選組の沖田以外の3人は刀に手をかけた。沖田は「やっぱり」といふ様子で物音をした方を見つめている。真選組の4人の前に一つの人影が見えた。「……!!」

銀時が木の陰から出ると明らかに真選組の3人は驚いていた。沖田は驚いた様子がないから、「やつぱりバレてたか・・・」と銀時は心の中で思った。「よお、こんなとこで何してんの？　ゴリラを野生に帰すために、こんなとこまで来たの？」　銀時はいつも通り振舞った。

「……・……」 真選組の4人は何も答えることはできなかった。銀時が追われているのを分かかっていて何故、姿を現したのかを理解できず何も答えることができなかった。

銀時は黙り込む真選組の4人を見て言い方はいつも通りだが何か悲しそうな寂しそうな表情をして言った。「真選組あんたらさあ、人を追いかけるなら気配を消さなきゃダメでしょ。だから、言っただろ。」

俺は、攘夷志士だったって……そんなに殺気ブンブンさせてたら逆に殺されちゃうよ。」

「どういつつもりだ・・・」と土方は言った。

「ああ？」

「だから、俺達に追われているのが分かっておきながら何故、姿を現した？」と土方は銀時に尋ねた。

銀時は視線を一度沖田に向けてから視線を土方に戻した。「何か、沖田君が気付いてたみたいだったからね。それと・・・この花束を見たら分かるでしょ？」と言って花束を真選組の4人に見せて言った。「墓参りの時くらいは一人になりたいだろ？」銀時は悔しそうな哀しそうな表情をしていた。

「墓参りに真剣が必要なのか？」と土方は銀時に尋ねた。

「これは、護身用だ。おたくら警察が仕事サボってて物騒だからなあ。」と銀時は先程の表情ではなく、いつも通りの表情だったが、どこか無理をしているような表情だった。

「ああ！！」土方は自分達がバカにされたことと本当のことを言おうとしない銀時の言葉に頭に血が上り刀を抜いて斬りかかるうとした。

「やめとけ、トシ！！」銀時を斬ろうとしている土方を近藤が慌てて止めた。

銀時は『急がねえとツラも来るし、ヤツも・・・』と心の中で思っていた。「もし、これ以上、付いてくるなら殺^やるしかねえなあ。」と言って刀を抜いて土方に刃先を向けた。

土方は「てめえ、この状況を分かって言ってるのか!？」と銀時に言った。

「ああ。俺一人で十分だ。」と銀時は答えた。

土方は銀時の余裕ぶりにキレて「上等だ!! やろうじゃねえか!!」と言った。いくら銀時が攘夷志士だったと言っても、こちらもいつも命を懸^かけて戦ってきた者たちだけだ。それに、数で言えば4人对1人。土方は銀時に一度負けているが今は負ける気は全くなかった。

「やめとけ!! トシ!!」近藤は土方を必死に止めようとしている。

沖田は静かに刀を抜いて戦う気だ。

山崎はどうしたらいいのか分からず戸惑っていた。

銀時は真選組の4人を見て「俺は急いでんだよ。」と言って刀を構え真選組の4人が立っている方に素早く走った。

「」「」「!!」「」「」真選組の4人は銀時の動きが速すぎて何もすることができなかった。

カチャッ

バタッ

バタッ

音とともに土方と沖田が倒れた。

「「！！」」 近藤と山崎は驚いていた。

「副長！！ 沖田隊長！！」 と山崎が焦って言った。

近藤は慌てて 「しっかりしろ！！ トシ！！ 総悟！！」 と2人に呼びかけていて、あることに気が付いた。2人とも血が全く出ていないのだ。ただ、気絶しているだけのようだった。銀時をよく見ると峰打ちの構えをしていた。銀時がこちらに走ってきた時は峰打ちの構えではなかった。すると、走っている最中に構えを変えたことになる。近藤は心の中で 『では、あの時 『力チャツ』 と音がしたのは構えを変えたからか？ あの速さで変えられるなんてバケモノだな。 しかも、あの総悟もやられてるしな・・・ 引き上げるか・・・』 と思っていた。

山崎は銀時に聞こえないくらいの小さい声で 「局長、どうするんですか？」 と尋ねた。

近藤も小さい声で 「とりあえず、引き上げるぞ。」 と答えた。

山崎は 「はい。」 と返事をした。

近藤は銀時に 「万事屋、助かった。 トシを止めてくれて・・・ それと、悪かったな。 墓参りに行くのに後を付けたりして・・・」 と言った。

銀時は近藤たちに背を向けて手をヒラヒラと振りながら去って行った。

短気は損気！！（後書き）

今回のタイトル『短気は損気！！』土方って結構、短気ですよね。皆さん、短気は損しますから気を付けて下さいね。

後先考えずに行動すると、絶対に後悔する！！（前書き）

また、何日も更新できませんでした。

スイマセン。

たぶん、次の話はすぐに更新できると思います・・・

では、第13話をどうぞ。

後先考えずに行動すると、絶対に後悔する！！

真選組パトカー

土方を近藤が背負い沖田を山崎が背負いパトカーまでやってきた。

「局長、旦那追わなくて良かったんですか？ 副長が知ったら・・・

」と気絶している土方と沖田を後部座席に座らせながら山崎が言った。

「体は私なり^{わたくし} 心は公なり^{おおやけ} 私を役して公に殉^{えき}う者を大人と為し^{おあやけしたが} 公を役して私に殉^{したが}う者を小人と為す・・・」と近藤が呟いた。

それを聞いていた山崎が「何なんですか？ 今の言葉？」と近藤に尋ねた。

「俺が子どもの頃、ある人に言われた言葉だ。『体は私で、個別的なものであり、心は公で、普遍的なものでなければならぬ。私の肉体を使つて、身をかえりみずに公のために役立てる者は、りっぱな人であり、公である心を私の欲望のために満足させることに使おうとする者は、徳のない取るに足らない人である。』という意味だ。」と近藤が答えた。

「へえ」で、そのある人ってどんな人なんですか？」と山崎が尋ねると

近藤は懐かしそうな顔をしながら「その時、偶然知り合つた方なんだが・・・」

時は遡^{さかのぼ}って近藤の幼少期

江戸に遊学^{ゆうがく}に来ていた男がいた。ある日、その男は武蔵国（現在で言うと東京都・埼玉県・神奈川県東部）のとある村（現在で言うと東京都内）に訪れていた。

近藤は武蔵国のとある村に住んでいた。近藤は一人で町を歩いていた。

すると突然、男の人の声がした。「おいっ！！ 小娘、断るとはどういう見だ！？」

別の男が「度戦^{たび}のために攘夷^{じやうぎ}を論ずる我ら志士に酌^{しやく}の1つや2つ・・・むしろ自分からするのが当然であろうが！！」と言った。

男2人が建物と建物の間の所で女の人に詰め寄っていた。男の1人が女の人の手首を掴み逃げられないようにした。

「やめてっ！！ 離してっ！！」と女の人が抵抗するが男の人相手に無理な話だった。

それを見ていた近藤は女の人を助けようと走り出すが、その前を1つの影が通り過ぎた。

「離してあげて下さい！！」と影の人物が言った。

「何だと？ 邪魔をするなら・・・」と男の1人が言いながら刀を抜いた。

その影は刀を抜いて素早く男に斬りかかった。

カチャッ

男は倒れたが、ただ気絶しているだけだった。もう1人の男はそれを見て逃げて行ってしまった。

それを見ていた幼い近藤は、その影の主の凄さに驚いていた。峰打ちの構えではなかったのに峰打ちをされ男は気絶している。斬りかかる瞬間に構えを変えた、その影の主は近藤は憧れを抱いたのである。

その影の主は刀を鞘に納め女の人と少し話してから近藤に近づいた。影の主は、まるで女の人のように髪が長くグレーの髪色をした男の人だった。「君、危ないですよ？ 子どもが大人2人相手に・・・」と優しく話し掛けた。

「大丈夫だよ。俺、強いから。」と近藤は自信満々に言った。

近藤の言葉を聞いて「そうですか。でも、危ないから次からはダメですよ。そんな君に1つ私の教えを授けましょう・・・わたし体は私なりおあやけ心は公なりえき私を役して公に殉おあやけしたがう者を大人と為しな公を役して私に殉えきしたがう者を小人と為す」と言った。

幼い近藤は意味が理解できないと言うように首を傾げた。

その男の人は、目の前にいる子どもの様子に微笑みながら言った。

「『体は私で、個別的なものであり、心は公で、普遍的なものでなければならぬ。私の肉体を使つて、身をかえりみずにお公のために役立てる者は、りっぱな人であり、公である心を私の欲望のために満足させることに使おうとする者は、徳のない取るに足らない人である。』という意味です。あなたが大人になつてもそうであつて欲しいと思います……」

真選組パトカー（現在）

近藤は助手席から運転している山崎に子どもの頃に出会つたある人のことを話していた。近藤は話している途中で、あることに気が付いた。その日のあのひとと今日の銀時が全く同じなのである。構えは峰打ちではなかったのに斬りかかる瞬間に構えを変えたことが……近藤は何となく不思議な気持ちになつていた。

「その人、すごく強かつたんですね。局長にも、少しやんちゃな時があつたなんて意外です。」と山崎が言つた。

「……」

「局長、どうしたんですか？」 山崎は何も言わない近藤に呼び掛けた。

「っあ……いや……何となくあのひとと万事屋が似てるなあーと思つてな……」 と近藤は答えた。

「ああ、確かに似てますね。」 と山崎が今日の事を思い出しながら言つた。

「「うーん。」」と声がした。

近藤は声がしたので後部座席の方を振り向いた。すると、土方と沖田が意識を戻したようだった。

近藤と山崎は2人にどう説明しようかと考え込んでいた・・・

後先考えずに行動すると、絶対に後悔する！！（後書き）

今回のタイトル『後先考えずに行動すると、絶対に後悔する！！』
は近藤が帰ろうとしたが土方と沖田にどう説明しようかと考え込んでしまっているのです、そうしました。

オリジナルの近藤の過去を書いてみましたー！！ある男が江戸ではないですが遊学にどこかに行っていたのは事実ですし近藤に言った教えも、そのある男が言った教えです。誰か分かった方も・・・？過去話の中で男が女に詰め寄っている時の台詞は某アニメの台詞をそのまま持ってきたものです。分からないと思いますが・・・答えは次話で・・・

野生の勘って結構、よく当たる！！（前書き）

前話で書いていた某アニメの台詞をそのまま持ってきた某アニメは「薄O鬼」です。完全に通行人Aとかがしゃべるような台詞だったんで分からなかったと思いますが・・とりあえず頑張って書きました。感想を書いて下さる方がいて感激している今日この頃。お気に入り登録などの数値も高くなるにつれ興奮している自分がいいます。

そんな興奮気味な状態で書いた第14話をどうぞ。

野生の勘って結構、よく当たる！！

ーとある船ー

「着いたようだな。 エリザベス、お前はしばらく船の中で待っていてくれ。」 と桂がエリザベスに言った。

桂の言葉を聞いて 「分かりました 桂さん・・・」 と書かれたボードをエリザベスが持った。

2人が乗ってきた船は目的地からだいぶん離れたところに着陸した。大型の船でなくても船が着陸すれば目立つからだ。

桂's 視点

エリザベスを船に残し歩き出した。目的地に近くの山の中に入ると5人の気配を少し遠くに感じた。しばらく歩くと遠くに銀時の姿が見えた。そして、銀時の目の前にいるのは真選組だ。『真選組がいるから姿は見せられないな。 それに、銀時のことを調べていた様子だったから今、一緒にいるのを見られるのは面倒だな。 しばらく、様子を見るか・・・』 と心の中で思い木の陰に隠れた。

とある山

銀時は真選組の気配が消えたのを感じると 「行っただか・・・」 と呟いて足をとめると暗闇に話し掛けた。 「そこで何やってんだよ？ ツラあ？」

すると木の陰から桂が現れた。「気が付いていたか。」と桂が言った。

「当たり前だろうがあ。」と銀時はいつもの面倒くさそうな表情で頭を掻きながら答えた。

「で、大丈夫なのか？」と桂が唐突に銀時に問い掛けた。

「何があ？」銀時はダルそうに答える。

桂は腕を組みながら「真選組のことだ。一緒にいるところをこれ以上、見られたら・・・」と言い掛けてやめた。何故なら真選組に怪しまれる原因を作っているのは自分だと思っているからだ。

「大丈夫だろ。近藤ゴリウが連れ帰るだろうし・・・」と銀時が言っている途中で桂が遮った。

「ふざけている場合ではないのだぞ！！それに、心配しているのは真選組のことなどではない・・・」と桂は銀時に怒鳴った。

「分かっているって。」桂の心配して言っている言葉を理解した上で、銀時は一言で答えた。銀時は分かっていた。桂が『自分のせいで真選組に怪しまれてるんじゃないか』って心配になっているのも、この前の手紙のこともあるから心配しているのも・・・

桂はまだ何か言いたげだったが、それ以上は何も言わなかった。

銀時は今の空気が嫌になったのか「行くぞ。」と桂に言った。

桂はまだ少し不安な気持ちを抱きながらも「ああ。」と答えた。

真選組パトカー

「「うーん。」」と声がした。

近藤は声がしたので後部座席の方を振り向いた。すると、土方と沖田が意識を戻したようだった。

近藤と山崎は2人にどう説明しようかと考え込んでいた・・・

「ここはどこだ？」と土方がキョロキョロ見回しながら尋ねた。

「パトカーだ。」と近藤が答えた。

「「!!」」

「万事屋はどうした!？」と土方が慌てて近藤に尋ねた。

沖田も気になるのか近藤の言葉に耳を傾けた。

「万事屋はどこかに行ったよ。今は、屯所に帰つてるところだ。」と近藤は答えた。

土方は近藤の言葉を聞いて頂垂れた。

沖田は何も言わないし無表情だったが真選組の中で剣が強かったのは沖田だ。その自分が負けた・・・と心の中で葛藤していた。

「トシ、1つ聞いて欲しいことがある。」急に近藤は真剣な表情になり山崎には話したある人について話し出した。

「ということがあったんだ・・・」近藤は全てを土方と沖田に話し終えた。

「それがどうしたんだ？今のことに、どう関係があるんだ？」と土方が近藤に尋ねた。鬼の副長と呼ばれていても急に昔に出会った人のことを話されても何故その話を今するのか分からないだろう。

「少し気になることがあつてな・・・1つ目は、山崎にはもう言ったことだが、あの人も万事屋も斬りかかる瞬間に構えを変えたことだ。」と近藤が真剣な顔をして言った。

「それは、分かるが他にも何かあるのか？」と土方は近藤に尋ねた。

「2つ目は、あくまで俺の勘みたいなものだが、あの人と今日の万事屋とがダブって感じてなあ。まるで、同じ人を見たような・・・」と言った。その続きは言わずに心の中で呟いた。『あの人は今、どうされているだろうか・・・？』

土方は近藤の言葉に驚き何も言えなかった。まさか、そんな言葉が返ってくるとは思っていなかったからだ。

沖田は近藤の言葉を聞いて『あの人はどんな人なんだろうか？』と考えていた。

野生の勘って結構、よく当たる！！（後書き）

今回のタイトル『野生の勘って結構、よく当たる！！』はゴリラ・
・じゃなくて近藤が土方達に自分の勘みたいなのを言っています。
近藤は普段からゴリラ扱いされてるんでこうなったわけです。

ちなみに次話では、ある人と登場するとか言って一度も出ていない
あの方を登場させようかと思っています。

刃物を人に渡す時は、刃の部分を持って渡しなさい！！（前書き）

前話の更新した次の日に更新はできたんですが、ちょうどきりのいい所で終わらせようとしたら短くなってしまいました。スイマセン。次話をすぐに更新できるよう頑張ります！！

短いですが、第15話をどうぞ。

刃物を人に渡す時は、刃の部分を持って渡しなさい！！

数日前

満月が浮かぶ空に飛んでいる巨大な船が一隻。その船の月の光が射し込む部屋に4人の人影・・・

「晋助様あゝ！！ 本当に行くんツスカ！？」 ミニスカートをはいて、へそを出した着物を着て拳銃2丁を腰の両サイドにぶら下げている女 来島また子が尋ねた。

「ああ。」 蝶の模様の派手な着物を着て部屋の窓から月を眺めながら煙管キセルを吹かしている男 高杉晋助が答えた。

「晋助が行くと言うのなら何も言わないでござるが・・・」 革ジャンを着てサングラスをしてヘッドホンを耳に当てて三味線を弾いている男 河上万斉が言った。

「あいつらが目障りだからなあ。」 と高杉が何か言いたげな河上に対して言った。

「今、行かれるのは得策ではないかと思いますが・・・ 相手は共に攘夷戦争を戦い抜いた2人・・・」 と目が特徴的な男 武市変平太が言い掛けてやめた。何故なら・・・喉元に刀の刃先が向けられていたのである。武市は完全にビビッてしまった。武市は頭はキレるが剣は全くと言ってダメなのである。

高杉は「それ以上、言ったらブツた斬る。」と顔色一つ変えずに言った。いや正確には目がすごい怒りを伝えていた。確かに攘夷

戦争を共に戦い抜いた戦友でも今のこの世界を破壊したいと願う高杉にとっては嫌なのかもしれない・・・「とりあえずだア、その日は長州に着いたら俺は1人で行く。その後は、お前らに任せる。」と言った・・・

江戸に遊学に来ていた、ある男のその後

男は故郷である長州萩城下の松本村に帰ってきていた。帰ると叔父が病気で寝込んでいた。その男の叔父は松下村塾という私塾を開いていたのだが、今は立つことも困難なため講義をするのは無理なのである。しかし、男の叔父は子ども達のためと子ども達の笑顔が見たいと講義をしたがったのです。

「叔父さん！！ 無理をなさらないで下さい！！ 叔父さんが無理をして悲しむのは叔父さんの大好きな子ども達なんですよ！！ 私 が代わりに講師をしますから！！」 と男が布団を抜け出して講義をしようと教室に向かう叔父を慌てて止めた。

男の言葉を聞いて男の叔父は布団を抜け出すことはなかったが、代わりに子ども達が抜け出そうとする自分達の講師を心配して顔を見せることが多くなった。子ども達はすぐに、その男になつき男が大好きになつていった。

それから数カ月後、男の叔父は自分の教えていた子ども達が楽しそうにしていたのに安心したのか安らかに眠りました・・・。

その後、その男は自分の叔父が残した大切な私塾を継いで講師になりました……。

そう、その男こそが攘夷戦争の後期に活躍した4大武神の3人を育てあげた『吉田松陽』だったのです。

とある村

銀時や桂が歩いた先にあつたのは建物の焼けた跡と門が残った場所だった。

銀時は焼けて何も無いところに買ってきた花束を置いて目を閉じて手を合わせた。

桂はそれを見て懷から緑色の教本を取り出して花束の隣に置いて銀時と同じように目を閉じて手を合わせた。

銀時は桂が置いた物を見て「いいのかよ。それ。」と言った。

「ああ。先生には一度……一度ではないな何度も護ってもらった。いつまでも、護ってもらうわけにはいかないのな……。」と答えた。桂が言った『一度』は似蔵に斬られた時のことを言っているのだろう。

銀時は桂の答えに「そうか。」とだけ答えた。

2人が来ていたのは長州萩城下の松本村にある松下村塾があつた場所であり、2人が育った場所だ。

ザッザッ

「どうやら来たみたいだぜ。」 と銀時が音のした方を向きながら言った。

桂も銀時と同じ方向を向きながら言った。 「そのようだな。」

音がした暗闇からは 「よう。」 という声が聞こえ、その人物は片手に煙管キセルを持っていて微かすかに煙が漂っている。

刃物を人に渡す時は、刃の部分を持って渡しなさい！！（後書き）

今回のタイトル『刃物を人に渡す時は、刃の部分を持って渡しなさい！！』は今まで登場させてなかった高杉たち鬼兵隊を登場させ話を考えてた時に紅桜の時に似蔵が高杉を怒らせて刀を向けられていたんで可哀想ですが武市先輩に犠牲になってもらったんでこうしたわけです。

「大江戸青少年健全育成条例改正案、反対イー！！表現を律する暇があるなら己の心を律する術を覚えよ！！漫画もアニメも無い時代からロリコンは存在しているんだアー！！向き合い律する心を育むのは大切じゃないのかアー！！ちなみに、私はロリコンじゃあない。フェミニストでえーす。」 by 武市

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9180w/>

囚われた者たち

2011年11月17日19時43分発行